

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 国際化と日本人の文化的なアイデンティティ

著者	小川 エリナ
雑誌名	現代社会研究
号	11
ページ	11-17
発行年	2013
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00007043/">http://id.nii.ac.jp/1060/00007043/</a>

# 国際化と日本人の文化的なアイデンティティ

小 川 エリナ

本論文は、国際化と、日本人の文化的なアイデンティティと、二つのテーマを結ぶ。もっと正確に言うと、文化的なアイデンティティの視点から国際化について述べる。最初に日本の社会、次に日本人、最後に個人の文化的なアイデンティティを分析し、自分にも他人にも全体的かつ包括的な見方を実証する。国際化という話題について、文化的なアイデンティティという視点からアドバイスをする。他の国との文化の違いに注目するよりも、日本の社会、日本人、そして個人をもっと知り、もっと理解をする事を元に「多文化」を認め合える国際化が可能になる。日本社会の国際的な面を明らかにした後、様々な日本人の文化的なアイデンティティの例を挙げる。そして、個人の文化的なアイデンティティを理解するために、文化、又は文化的なアイデンティティ、のモデルを紹介する。

keywords：国際化、文化的なアイデンティティ、日本人、多文化社会、アイデンティティのモデル

## 目 次

序論：

1. 日本の社会
2. 日本人
3. 個人

結論：

## 序 論：

多文化的なアイデンティティの理解は日本の国際化のために必要である。多文化アイデンティティの研究の視点から見て、今の日本の国際化の問題点は、他の国の文化との考え方が違いすぎる、また違いが大すぎる、共通のものがなかなか見つけられないと心配していることである。ですが、世界の文化というのは、つながりのない独立している文化グループという「他文化」(図1)よりも、一つの大きな文化グループの中に含まれている複数の文化グループの「多文化」(図2)の方が現実的であろう。

他の文化という意味の「他文化」よりも、多く

の文化の「多文化」という言葉で考えると同時に、国際化やアイデンティティの問題をもっと身近に考えることで、その心配は解消されるであろう。一人ひとりがもっと自分「個人」を知り、もっと「日本人」、そして「日本の社会」を知ることで、「世界」を身近に感じることはできないのではないか。そして、「国際化」をもっと理解することができると思う。

## 1. 日本の社会

国際化や日本人のアイデンティティを理解するには、「世界」よりは、「日本の社会」を考えることから始めなければならない。ただし、それは世界に対する日本よりも、世界の中にある日本である。日本VS外国や日本人VS外国人という発想では物事がうまく行かない。なぜなら、世界には様々な民族と文化グループが存在している。それぞれのグループは他のグループと違う点や共通点がある。例えば、ナイジェリア人やスイス人とは違って、日本人は同じアジア人として、マレーシ



図1 「他文化」のイメージ

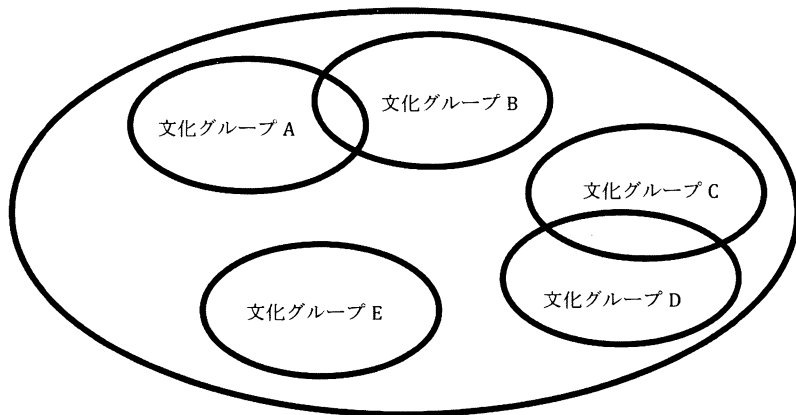


図2 「多文化」のイメージ

ア人や中国人と共通点がある。地理的な事情や天気の影響をうけた植物や食べ物の種類、またはDNAが原因で人びとの肌の色が似ているという共通点は当然すぐに思い浮かぶ。だから日本人は外国人とは思っているほど違ってないし、外国人をみんな一緒に見るのは間違いである。

世界は広くて、いろいろな国がある。そして、それぞれの国の中にも文化的なグループが存在している。例えば、カナダという国ではフランス語と英語、二つの国語で社会が成り立っている。筆者の祖国であるニュージーランドでも、2011年の2月に起こったクライストチャーチの大地震の時の総理大臣の公式発表は英語、原住民のマオリ語、そしてニュージーランド手話という三つの国語で放送された。それぞれの国の中にあっても人の国民としての文化的なアイデンティティは単純ではない。日本人の国民としての文化的なアイデンティティも実は複数存在している。

日本は国際社会でもある。現代の日本は世界とのつながりの中でやっている。それは物の貿易だけでなく、人事の国際的な移動やチームワークまで広がっている。日本に来た文化のグループの人々を最近の例で挙げるとブラジルなどから来た二世人である。この人たちも日本の社会を動かし、日本人というアイデンティティを持たなくても、日本に住む市民として認めなければならない。同じく、人生の大半を日本で過ごし、日本のために働いている様々の国から来た外国人も日本の社会

の人々である。そして、近い将来には、高齢社会の現状から日本が移民をもっと多く受け入れなければならないとゲリー・ベッカーというノーベル賞を受けた経済学者などが述べる (Gary Becker, Myron Scholes, & Tsugio Tajiri, 2008)。経済的・社会的な条件が似ている多くの国のように、日本も移民を受け入れる計画を進めていかなければならない現状となっている。

## 2. 日 本 人

他方において、日本の社会は古来より多文化社会である。世界の多くの国と同じように、日本人は一つの文化グループではなく、様々の文化グループが存在する。例えば、北海道に集中しているアイヌとしてアイデンティティを確立している人々や昔から差別をされてきた被差別部落民として所属している人々も日本人である。では、在日韓国人も日本人ですか。国籍は韓国になっていても、文化的視点から見た場合はどうでしょう。答えは個人によって、違うと思う。例えば、在日韓国人の中には日本で生まれ育ち、日本語しか話せなくて、日本から出た事もない、日本しか知らない人がいる。その人は「外国人だ!」と言われるのは意味のない排斥活動だと思う。在日韓国人の研究をしてきたSoo im Lee (2012) も本人たちの文化的なアイデンティティを認めるべきだと述べる。同じような事情をいえば、日本で生まれて、育ってきた、日本人としてのアイデンティ

表1 東大震災前・後の文化的なアイデンティティの変化「2011年7月の調査」

	2011年3月11日以前	2011年3月11日以降
地方出身	0.04	-0.11
男性／女性	-0.18	-0.12
日本人	-0.39	-0.35
国際人	0.19	0.16
日本語を話す人	-0.03	-0.07
英語を話す人	0.30	0.26

表2 東大震災前・後の文化的なアイデンティティの変化「2012年7月の調査」

	2011年3月11日以前	2011年3月11日以降
地方出身	0.10	-0.14
男性／女性	-0.17	-0.10
日本人	-0.37	-0.36
国際人	0.17	0.18
日本語を話す人	-0.04	-0.06
英語を話す人	0.23	0.25

ティを持つ黒人や白人もいる。しかしながら、「箸使いが上手ですね」など外面のみ捉える事は、日本人としてのアイデンティティを否定する事になる。文化的なアイデンティティは肌の色やパスポートの国籍で決まるものではない（Stephen Murphy-Shigematsu, 2012）。日本人にはいろいろな人がいる。

地方による文化的なアイデンティティが変わると考える。2011年の3月に起こった東日本大震災の四ヶ月後の夏に筆者が行われたアンケート調査「941人」の結果（Erina Ogawa, unpublished）によると、震災後に東洋大学の学生は地方意識が高まっていた「表1」。下の表の数字が高いほど、文化的なアイデンティティのランクが低いのにに対して、マイナスの数字の方がランクの高いものである。したがって、表1の六つのアイデンティティの中では、2011年3月11日以前の「日本人」というアイデンティティが-0.39で一番強く、2011年3月11日以前の「英語を話す人」というアイデンティティが0.30で一番弱い文化的なアイデンティティになる。この結果では、地方出身のアイデンティティが低い0.04から高い-0.11まで高まった事がわかる。

2012年の夏にも同じ調査「1,002人」を行ったところで、地方意識が東日本大震災前と比べて高まっている様子がまた見えた（Ogawa, 2013）「表2」。2011年と2012年のアンケート調査で見られた地方意識の高まりが一時的だったとは考えられるが、いくつかの文化的なアイデンティティのランキングの中で地方出身は決して低いランクではなかった事からは地方出身が文化的なアイデンティティに影響をしていると思う。日本人は地方ごとに区別されると言えるだろう。

2006年に日本で生まれた子供のうち、30人に1人が外国人の親をもつという社会になってきた（Kyodo News, 2008）。そして、日本で生まれる子供の49人に1人が日本人と外国人の間で生まれている（Megumi Nishikura & Lara Perez Takagi, 2013）。筆者は2007年中にハーフの子供のいる20家族の親にインタビューをした。この研究からは、育てようとしている文化的なアイデンティティが家族によって違う事が分かった。場合によっては兄弟の文化的なアイデンティティが全く違うケースもある（Ogawa, 2008）。その理由は、家族の事情がそれぞれ違うから（Ogawa, 2009c）。例えば、主にアメリカで育てられ、アメ

表3 多文化的なアイデンティティを持つ大学生の文化的なアイデンティティ

Single	1つのメインのアイデンティティ	Antonio, Toshio, Nobuyuki
Combined	二つの平等なアイデンティティ	Tom
Global	世界の人間	Dinnah, Enrique
Undecided	未定	Satomi

リカ人としてのアイデンティティを強く持つ姉に対して、主に日本で育ってきた弟は日本にルーツがあるため、日本人としてのアイデンティティが強いケースがある。

この研究結果から、日本で二つ以上の文化がアイデンティティに影響している子供を持つ親が育てようとしている文化的アイデンティティを大きく三つに分けた。一つ目は、日本に住んでいるため、主には日本人として育ち、文化的なルーツをしっかりと持たせる親（Single）である。二つ目は、両親の文化的アイデンティティを平等に持たせようとする親（Combined）である。例えば、子供はアメリカ人でもあり、日本人でもあるという親はこのタイプになる。三つ目は、一つ目のタイプと反対のように、子供にはあえてルーツを持たせないようにする親（Global）である。この親は世界の人として、世界中の人々は自分たちと同じ人々だと子供に教える。

筆者が2008年7月に行った別の研究では、多文化的なアイデンティティを持つ大学生に質問をした。全国語学教育学会バイリンガル研究支部のためのこの研究の結果（Ogawa, 2009b）では、埼玉県のある大学で7人の学生をインタビューしたところ、3人は一つ目、1人が二つ目、2人が三つ目の文化的アイデンティティを持つと答えた。もう1人は自分の文化的アイデンティティについてまだ迷っているところであった「表3」。この研究の結果によっても、家族や個人の事情が文化的アイデンティティに影響をしていると考えられる。文化的なアイデンティティの面からは、日本人であることは、白と黒の問題ではない。

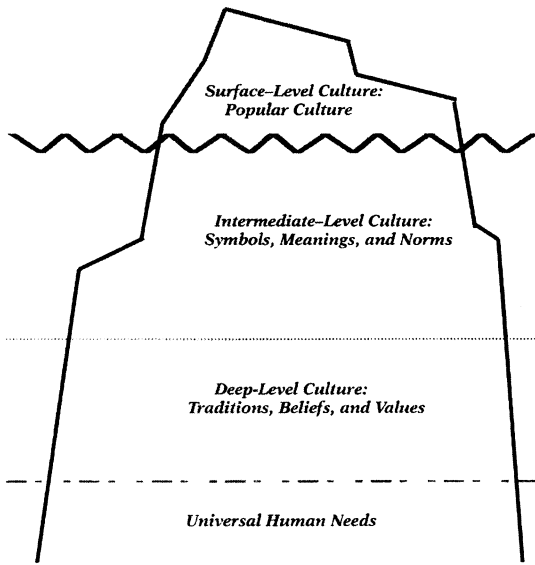
### 3. 個人

国際化や日本人のアイデンティティを理解するには、さらに「日本人」の一人である「個人」を考える必要がある。ここでは文化的なアイデン

ティティのモデル等を使って「個人」の多文化アイデンティティについてもっと理解するため、アイデンティティや文化のモデルを紹介する。

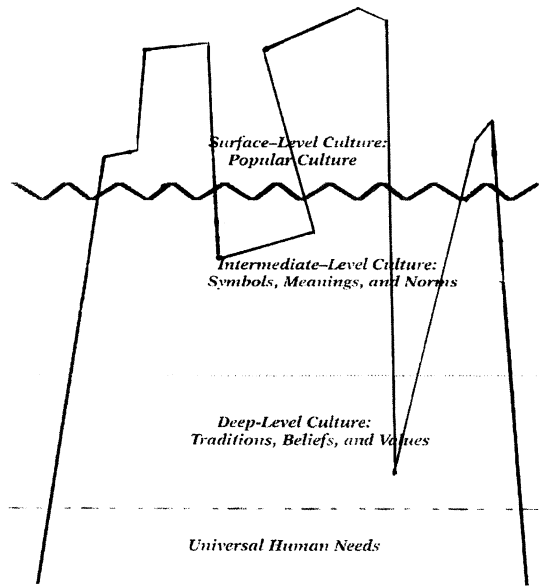
James Paul Gee (2000) は社会的・文化的なアイデンティティ・タイプを分かりやすく4つのタイプ「アイデンティティの見方」に分けた。N-Identity (Nature) というのは生まれた時の条件から与えられたアイデンティティである。たとえば、性別のジェンダーアイデンティティの面からみると筆者は女性であり、女性としてのアイデンティティを持つ。I-Identity (Institution) というのは企業や機関から与えられたアイデンティティである。筆者をまた例にすると、東洋大学が筆者を大学講師として認めたことによって、講師としてのアイデンティティを持つ。D-Identity (Discursive) というのは他人とのコミュニケーションで成り立つアイデンティティである。例えば、人とのコミュニケーションを通じて、筆者が優しい人というアイデンティティを得る。A-Identity (Affinity) というのはあるグループのメンバーとして活躍をすることによって、アイデンティティが発生する。ネット上のグループも同じである。時には狭い範囲での共通点があって、別の場では共通点がほぼ見つからない事もある。筆者が参加している東日本大震災の研究者のグループが一つの例になる。

上の説明で自分がさまざまな文化グループのメンバーであることが分かる。さらに、文化には深度がある。氷山の文化モデル（Stella Ting-Toomey & Leeva Chung, 2005；図3）などでは表面的な文化や奥深い文化の違いが分る。まず、表面的な文化（Surface-Level Culture）はよく見えるものであって、海外に行ったりすると服装が違う、言葉が違うなど、分かりやすい文化の違いを表せている。ですが、表面的な文化はほんの一部であり、タイタニック号が当たった氷山と同



(Ting-Toomey &amp; Chung, 2005, p. 28)

図3 チン・トーミー &amp; チャングの氷山



(Ogawa, 2009a, p. 29)

図4 マルティカルチャルアイデンティティの氷山

じように、実は隠れている部分の方が圧倒的に多いのである。

このモデルでは、隠れている文化は三つのレベルに分かれている。表面に一番近いのは中間文化 (Intermediate-Level Culture) であり、「常識」という言葉がよく当てはまると思う。常識は文化によって (国によって) 違うものであるため、当然分かれると思われる事が違う文化グループの人にとっては当然分かる事ではないというケースが異文化コミュニケーションではよく問題を発生させている。常識、すなわち裏の意味、普通で行われている事などは文化グループによって違う。中間レベルの次にあるのは深い文化 (Deep Culture) である。このレベルには伝統的な物など中間レベルの常識など、そして表面的な行動などを動かしている価値観などが働いている。表面的な文化と中間的な文化よりも自覚しにくいものである (Joseph Shaules, 2007)。もし、自分の文化について説明を頼まれたとしたら、表面レベルの行動や中間レベルの常識についてよりも深い文化の価値観を意識的に理解し、説明する方が難しい。最後に、さらに深いレベルがある。共通的な

人間のニーズ (Universal Human Needs) は、文化グループに関係なく、人間がだれでも持っている文化である。根本的な家族への愛、お世話になった人への尊敬などである。この一番深いレベルになると、皆は同じである。ですが、深い文化、そして中間文化を通して、表面の文化レベルで表現されるので、違う形にはなる。ですから、他の文化グループの人は自分の文化グループの人とは全く文化が違うと思いがちである。ですけど、国際化や異文化理解をうまく行うには一番根元にある人間のベースが同じことを忘れてはいけないと思う。表現、行動、常識などが違ってても、気持ちは同じであると思えば、良い関係になれる。

上のチン・トーミーとチャングの氷山の例を参考に、筆者が一人の人物の中のマルティカルチャルアイデンティティのモデル (Ogawa, 2009a) を考えた。このモデル (図4) は、一人の人物の三つの文化を表している。この三つの文化は表面レベルでは形が違う。左にある二つの文化は中間レベルではほとんど共通しているが、右にあるのは中間レベルがほとんど違う。深いレベルでは右にある文化だけが違う。もちろん、ベースは同じ。

例えを作ると、左にある二つの文化グループは同じアジアにある日本と韓国で、右にあるのはヨーロッパにあるスウェーデンかもしれない。それとも、左の二つはある大学生の大学の文化グループとパートの職場の文化グループであり、右は家庭の文化グループかもしれない。

この氷山の例では、三つの文化グループに参加をしている一人の人の文化的なアイデンティティを表している。複数のグループのメンバーであり、文化的なアイデンティティは色々なところに所属する。時間や場所や事情により、自分の文化的なアイデンティティの主張を変える事ができる。文化グループによっては参加しているところが違って、アイデンティティにしているところも違う。それぞれの文化グループのメンバーであり、総合的組み合わせから個人の文化的なアイデンティティが出来上がってくる。一人一人の文化的なアイデンティティが複雑であり、他の人とは同じではない。一人一人が、ユニークな文化的なアイデンティティを持っている。

アマルティア・センという経済学者が「アイデンティティと暴力」という本を通して、世界平和と進歩のために、世界の人々が全員、相手も自分も多文化的なアイデンティティを持つ事実を認めるように強く主張している (Amartya Sen, 2006)。経済分野でのノーベル賞を受けている方である。Tope Omoniyi (2006) や Tamara Valentine (2009) も一人一人のアイデンティティが多文化的である事をもっと理解し、受け入れるべきだと述べている。

## 結 論：

他の国の文化との考え方が違いすぎる、また違いが大きい、と考えるのではなく、他の国の人は実は自分と同じように多文化を経験している人として認める事で、共通点を見つけることができる。例えば違いすぎだと思っていた相手でも、自分についての見方が変われば、相手を知ることができる。これは、人間はみんな同じ人間として尊敬し合う、本当の国際化の方法であろう。

以上をまとめると、国際化や日本人のアイデンティティを理解するには、「個人」が様々なアイ

デンティティを持つと同じように、「日本人」も様々な人々から構成され、それゆえ「日本の社会」は十分に多文化社会だと気付くことが大切であろう。自分は多文化的なアイデンティティを持っていて、自分の中でも様々な違いが存在しているのと同じく事によって、他の人との違いが受け入れやすくなる。そして、日本の社会や日本人の多文化を認める事で、他の国との共通点が見つけやすくなる。最後に、他人の文化がいくら違って、人と人には必ず共通点がある事実に安心して、他の国の人とお互いの共通点を見つけ合うことで、一人ひとりの日本人のアイデンティティを生かした国際化が行われると筆者は信じる。

## 引用文献：

- Becker, G., Scholes, M., & Tajiri, T. (2008). *Forum : Creativity in the 21<sup>st</sup> Century* [Public Forum]. Kawagoe, Japan: Tokyo International University.  
(Please note that a partial transcript of this forum is available at <http://info.yomiuri.co.jp/yri/n-forum-en/nf-en2008.htm>).
- Gee, J. P. (2000). Identity as an analytic lens for research in education. *Review of Research in Education*, 25, 99-125.
- Kyodo News. (2008, August 4). More children born with a foreign parent. *The Japan Times*. Retrieved from <http://www.japantimes.co.jp/news/2008/08/04-national/more-children-born-with-a-foreign-parent/#.UiV0Heqmrcs>
- Lee, S. (2012). *Diversity of Zainichi Koreans and their ties to Japan and Korea*. (Working paper series : Studies on multicultural societies No. 8, Afrasian Research Centre, Ryukoku University, Tokyo, Japan).
- Murphy-Shigematsu, S. (2012). *When Half is Whole : Multiethnic Asian American identities*. Redwood City, C. A. : Stanford University Press.
- Nishikura, M., & Takagi, L. P. (2013). *Hafu : The film*. Retrieved from <http://hafufilm.com/en/about/>
- Ogawa, E. (unpublished). Shifts in Japanese university students' perceptions of their cultural identities after the Great East Japan Earthquake.
- Ogawa, E. (2013). Gender differences in Toyo University students' cultural identifications. *Toyo University Keiei Ronshu*, 80, 29-38.
- Ogawa, E. (2009a). A model for multicultural identities within an individual. *Toyo University Keiei Ronshu*, 74, 23-32.

- Ogawa, E. (2009b). Identities of young multicultural adults. *Monographs on Bilingualism No. 15 All Grown Up : The Bilingual Adult*, 15, 53-63. Retrieved from <http://www.bsig.org/monograph/mon15.html>
- Ogawa, E. (2009c). Strategies in cultural identity development. *Tokyo International University Language Communication Ronso*, 5, 71-108.
- Ogawa, E. (2008). Identity choices by parents of multicultural children. *Tokyo International University Language Communication Ronso*, 4, 75-100.
- Omoniyi, T. (2006) "Hierarchy of Identities" in Tope Omoniyi and Goodith White, eds., *The Sociolinguistics of Identity*. London : Continuum, pp. 11-33.
- Sen, A. (2006) *Identity and Violence*. New York : Norton.
- Shaules, J. (2007). *Deep Culture : The hidden challenges of global living*. Clevedon : Multilingual Matters.
- Ting-Toomey, S., & Chung, L. (2005). *Understanding Intercultural Communication*. Los Angeles, CA : Roxbury.
- Valentine, T. (2009) "World Englishes and Gender Identities", in Braj Kachru, Yamuna Kachru, and Cecil Nelson, eds., *The Handbook of World Englishes*. West Sussex : Blackwell, pp. 567-580.